

あらえびす賞

「運命」から感じる音楽の世界

紫波第三中学校 2年 藤原 光利彩

音楽の授業で、ベートーヴェンが作曲した「交響曲・第5番・ハ短調」を聴く機会があった。私はピアノを習っているのでベートーヴェンという名前は、なんとなく知っていた。ベートーヴェンが作曲したピアノ曲「エリーゼのために」は、聴いたことがあり優しく、なめらかな旋律がとても心に残っていた。しかし、授業で聴いた「交響曲・第5番・ハ短調」第一楽章は、私がイメージしていた雰囲気とは、なかった。第一楽章には、力強い旋律で耳に残るリズムが繰り返し演奏される。冒頭「タタタダン」というリズムはとても有名で誰でも聴いたことのあるリズム。「運命が扉を叩く」とベートーヴェン自身が語ったとされることから日本では、「運命」とも呼ばれている。第一楽章に比べてこのリズムと旋律は第一主題の動機として始まり「重い扉を叩く」感じがとてもした。力強さは、どこから感じとれるのか…それは、弦楽器とクラリネットで演奏される短調の響きから感じとることができると思う。第一主題の動機が、次から次へと演奏される部分では、何かがおしこまれてくる迫力があり、楽器の音色の重なりが、むしろ「運命」の重さとして感じられる。ベートーヴェンの「運命」の音楽は、耳が聴こえなくなる中での作曲の仕方から考えられると楽器の一音一音がいかりや苦しみの音色に聴こえてくる。

第一楽章には、第二主題もあらわれる。第一主題とは対照的にとてもおだやかで優しい旋律だ。楽譜をみると四分休符で書かれていて、確かに第一主題とは、リズムが違うことがわかる。こんな短い旋律でも、まったく雰囲気が違う音楽が表現できるんだと改めて感じることができた。ベートーヴェンは二十代後半から耳が聴こえなくなり、三十歳になるころにはほとんど耳が聴こえなかったそうだ。「運命」は三十四歳の時の作品といわれているので、まったく音の聴こえない世界でこの曲をつくりあげたのだ。怒りにも思える、力強さやめざましさを思えるやわらかさ…この二つの主題は私の心にとっても響いてくる。今までは「タタタダン」の旋律しかわからなかった

が、対比するやさしい旋律の美しさも感じることができた。

第一楽章は「ソナタ形式」である。提示部に続き、展開部、再現部、コーダへと音楽がひろがっていく。展開部では、楽器の組み合わせにより主題がどんどん展開されていく。「次々と扉が開かれていく」ような世界を感じる。ベートーヴェンの心の扉なのか。人間の心の扉なのか…。未来に向かっていく様子が浮かんだ。再現部では、全ての楽器で「タタタタタタ」の音楽が演奏される。提示部で奏でられる主題とは、重々しさがまったく違う。「これが私の運命だ！」といているような迫力だ。コーダは、曲の最後をしめくくる部分である。オーケストラのすべての楽器の響きが心に残る。第一楽章を聴いて他の三つの楽章も聴いてみたくなった。第二楽章は、「Andante con moto」ゆっくりに歩くような速さで動きをつけてとなっている。この楽章は、二つの主題があらわれその主題が変奏されていく。はじめの弦楽器の響きはなめらかでどっしりしている。ゆったりと自分の道を進んでいるような雰囲気だと思う。第三楽章は、初めの弦楽器の旋律とリズムが、これから何かが始まる予感を表現しているように思える。途中から元気のあるホルンの音色が聴こえ世界が開かれたような気分になる。このリズムも第一楽章の第一主題、「タタタタタタ」からつながってくるのであろう。暗闇から明るい光がさしこむように生き生きした旋律を感じることもできた。二つの旋律の違いを聴きながらベートーヴェンの作曲のすばらしさを少し感じることができた。第四楽章は「運命」のまとめ。全ての楽器の音色で光がだんだんさしこみ広がってきて、明るい未来がまっているような壮大な音楽だ。授業では、第一楽章の学習をしたが、私は、第三楽章と第四楽章の音楽がとても気に入った。旋律が盛り上がるところが多く、明るいイメージがとても好きだ。特に第二楽章から第四楽章にはいるところの曲の流れやつながりがとてもおもしろく感じる。

普段は、クラシック音楽を聴くことはあまりない。しかし日常の中では、クラシック音楽がたくさん流れあふれている。この曲もどこかで聴いたメロディーから全部を聴いてみたいと思った曲だ。今は様々な方法で様々な種類の音楽を聴くことができる。なので自分のお気に入りの音楽をたくさんみつけて音楽の世界を広げていきたい。そしてこれからも新しい曲をみつけ音楽

のある毎日をすくすく生きていきたいと思います。

曲名 交響曲・第5番・ハ短調
作曲 ベートーヴェン

あらえびす賞感想文について

審査員講評

藤原さんは、力強く始まる冒頭の動機から作曲者の苦悩する心の揺れを感じ取り、素直な文章で表しました。また、楽章を追うごとに雰囲気に変化していくことにも気づき、それらを豊かに表現しているところが印象に残りました。

ベートーヴェンの「運命」は希望に向かっていく音楽であり、現代を生きる私たちに勇気を与えてくれる音楽です。ぜひ、他の交響曲も聴いてみてほしいと思います。

教育長賞

1947年の響き、今の感動

学習院中等科 3年 上條 主税

私は、クラシック音楽のSPレコードを集めています。SPレコードとは、蓄音機が音楽の再生装置だった時代に流通していた、蓄音機で流すための専用のレコードです。大体120年前から70年前まで作られていました。最近ではもうあまり見かけなくなってしまったSPレコードは、私にとって宝物のような存在です。今はもうこの世にいない音楽家たちの演奏が、まるで時空を超えて目の前によみがえるように聴こえてくるからです。そんな中で、ついに手に入れることができた一つの特別なレコードがあります。それは、1947年に録音された、ブルノ・ワルターが指揮し、ニューヨーク・フィルハーモニックが演奏した、マーラーの交響曲第5番のSPレコードです。

この録音は、完全な形でのマーラーの交響曲第5番としては世界で初めての商業録音とされています。そして指揮をしているブルノ・ワルターは、マーラー本人と親しく交流していた人物として知られており、マーラーの作品を数多く録音しています。私は、「これはただの演奏ではなく、「マーラーを知る者」が「マーラーの音楽を未来へ伝えようとした」貴重な記録なのではないかと考えました。

この盤をいつもの蓄音機にセットし、ハンドルをゆっくり回しながら、私は少し緊張していました。スマートフォンやCDで聴くのではなく、私の手で回した蓄音機から、70年以上も前の演奏が流れてくるのです。

針がレコードの溝に落ち、ザツというノイズの中から、ゆるゆるとクラリネットのソロが聴こえてきた瞬間、自分は息を呑みました。

第1楽章の「葬送進行曲」は、とても重たく始まりです。音の一点一点に、悲しみだけでなく、何かとても強い意志のようなものもこもっているように感じました。ワルターのテンポは、今どきの指揮者に比べると少しゆるたりにしているように感じます。でもその分、音楽が言葉のように語のかけてくるように聴こえました。

第2楽章になると、音楽は一気に激しくなります。蓄音機の限られた音域

の中でも、ニューヨーク・フィルの演奏は、強弱の差がとてもはっきりしていて、迫力がありました。

第3楽章は、少し不思議な音楽です。明るくもあり、どこか不安な気持ちにもさせられるような、そんな複雑な雰囲気があります。ワルターは、この楽章を非常に自由に、でも丁寧に描いていて、まるで指揮棒が踊っているような印象を受けました。

そして第4楽章の「アダージェット」は、マーラーの音楽の中でも特に有名な部分です。ゆっくりとしたハープと弦楽器だけの演奏は、まるで時間が止まったかのように感じられました。古いSPレコードで、蓄音機から流れてくるこの楽章は、CDなどでは味わえない、特別なあたたかさを持っているような気がしました。ワルターは、この楽章を過度に「ロマンチック」にせず、内面的な静けさを大切にしているように感じました。

最後の第5楽章では、音楽が明るさを取り戻し、生きることへの喜びが溢れてくるようでした。あまりの素晴らしさに、最後のフィナーレでは思わず目をつぶってしまいました。終わった瞬間、部屋はしんと静まり返り、ただ蓄音機の回転する音だけが聴こえていました。私は、まるで遠い過去から誰かが語りかけてきたような、不思議な気持ちになっていました。

この録音を通じて、私は改めて、音楽とは「音」だけではなく、「時間」と「人の思い」が詰まった芸術なのだと感じました。SPレコードに刻まれた溝の中には、ワルターの解釈だけでなく、マーラーの息づかい、当時のニューヨーク・フィルの音色、そして1947年という時代そのものが閉じ込められています。それを、今の私が蓄音機で再生し、耳で聴いて、心で感じている、ということに私はとても感動しました。

この録音には、現代のどんな高音質録音でも再現できない、「人の思い」が詰まっています。私にとって、このSPレコードはただの古い音源ではなく、「演奏そのものが語る歴史」であり、「時間を超えて伝えられる声」なのです。

これからも、私はSPレコードを集め続け、自分の蓄音機で、音楽の「過去」に触れ続けていきたいです。そしていつか、私の言葉でその素晴らしさをもっと多くの人に伝えられるようになりたいと思います。



曲名	交響曲第五番嬰八短調
作曲	グスタフ・マーラー
演奏	ニューヨーク・フィル
録音時期	1947年 2月10日

優秀賞

二つのカントリーロード

紫波第一中学校 2年 鈴木 蒼惟

透明感のある歌声から始まる「カントリーロード」を聴くと、すぐにこの曲の世界に引き込まれ、どこか懐かしく、あたたかいような気持ちになります。

私は、この曲を映画「耳をすませば」で知りました。この映画は、自分の夢を実現するために懸命に頑張る少年と少女の物語です。二人の姿と心温まるメロディーが重なり、とても印象に残りました。

この曲は、ゆっくりと優しい歌声のサビから始まります。一転、Aメロでは、曲の雰囲気ガラッと変わり、弾むような明るいテンポになります。そして、全体的に澄んだ歌声で一音一音が長く伸ばされています。これらの音色から、ずっと続く道をゆっくりと一歩ずつ、力強く進んでいる様子が思い浮かび、初めて聴いた時でさえも懐かしさを感じる優しいメロディーでした。最近の曲は、電子的な音で気持ちをストリートに表現するような、リズムやビートが強い曲、二つの音がダイレクトに伝わってくる曲が多い印象です。それに比べて、「カントリーロード」は、ヴァイオリンやリコーダーなどでゆったりと奏でられていて、聴く人それぞれに考えさせるような曲想で、おだやかでつながりのある音大切にされています。この違いが、私を懐かしい気持ちになったことにつながっているのだと思いました。

また、この曲はアレンジされたもので、原曲があることを知りました。原曲はアコースティックギターをベースに心地よいリズムでテンポよく奏でられています。

原曲ができた一九七〇年代のアメリカについて調べてみると、この時代はベトナム戦争の戦後処理や都市での犯罪が多発するなど、アメリカの中でも暗い時代であり、社会混乱が起きていたことが分かりました。しかし、その一方で、映画などの文化が発達し始めた時代でもあったそうです。戦争の中で、家族や友人を戦地へと送り出し、無事に帰ってきてほしいと願った人がアメリカにもベトナムにも多くいたと思います。そして、敵も味方も関係な

く、大切な人に帰ってきてほしいと願う気持ちは同じだったのではないかと考えました。そんなときにできた曲だからこそ、「あなたの帰りをずっと待っていてくれる人がいる」「帰るべきふるさとがある」という勇気づけてくれるようなメッセージを感じられたのだと思います。加えて、平和であることがどれだけ幸せで、どれだけ尊いことなのか、改めてこの音楽を聴いて考え、向き合うことができました。

そしてどちらの曲からもふるさとへの想いが背中をそっと押し、包み込んでくれるような優しさが感じられます。

私のふるさとである紫波町は、田んぼや山、川など豊かな自然から四季が感じられ、果物や野菜、米などおいしい食べ物がたくさんある町です。そのうえ、人が集まる地域の祭りやイベントがある都会的な町並みも魅力的です。私にも、この曲のように寄り添ってくれる、あたたかいふるさとがあることに気づけました。

「カントリロード」は、自分の進むべき道を示してくれる、背中を押してくれる曲です。私が何か始めようとしたとき、考えに迷ったときは、この曲を聴き、ふるさとの景色や人のあたたかさを思い出していきたいです。そして、自分の信じている道、正しいと思う道をまっすぐ進んでいきたいと思っています。

曲名	作曲	作詞
カントリロード	タフィー・ナイバート	ジョン・デンバー
		ビル・タノフ